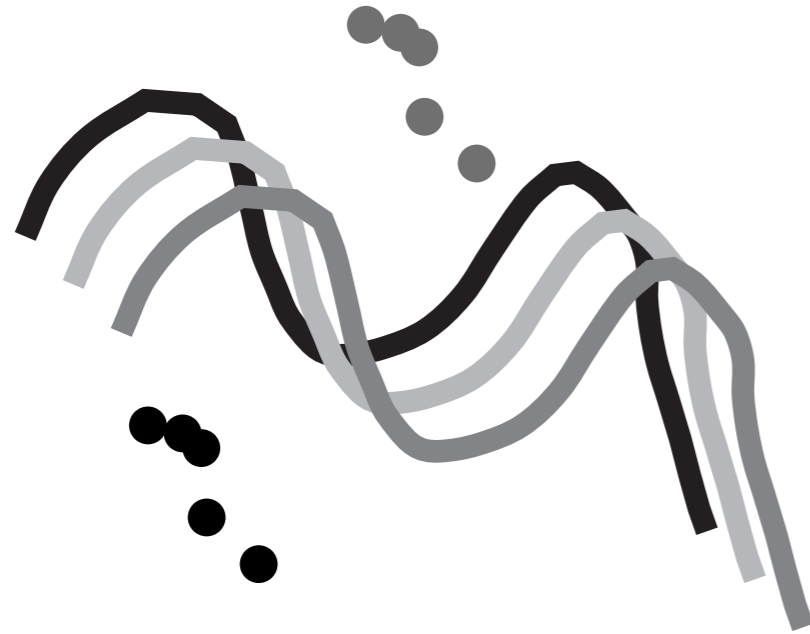

月 刊

MéLange

Vol.98



2015.01.25

特集/阪神・淡路大震災から20年

月刊「MéLange」 Vol.98 2015.01.25

月刊「MéLange」編集部

詩 & 俳句 & エッセイ

- 神秘〈俳文〉……………高橋雅城 04
- fromage……………月村 香 05
- 石の軌跡……………大西久代 06

特集 / 阪神・淡路大震災から20年

- あのとき(エッセイ)……………千田草介 07
- 二十年めの慚愧……………飛鳥井れん 07
- ろっけんみち……………野口 裕 08
- 苦いジュース……………黒田ナオ 09
- 行き方 知れずとも……………上野 都 10
- 海への道……………福田 知子 11
- この場所で……………中堂けいこ 14
- 待っているもの……………大橋愛由等 15
- 悼む……………有時秀記 16
- 光あれ……………岩脇リーベル豊美 18
- アナ、タ……………大西隆志 19
- ゑとき……………高谷和幸 20

震後詩のために(ふたつの詩と、ふたつの註)……………富哲世 21

エッセイ & 詩評

- 新連載 ひと言詩評……………富哲世 3
- 〈詩人通りより〉17「1945年1月22日エルゼ忌に寄せて」……………岩脇リーベル豊美 12
- HANA だより08〈貞久秀紀『雲の行方』をよむ〉……………中堂けいこ 17
- 哭晁卿衡……………李白 22
- 深夜の病室で……………寺岡良信 23
- 神戸詞あしび86「20回目を迎えた震災1・17の日」……………大橋愛由等 24

編集部だより★19/2015年となった。この「月刊めらんじゅ」が誕生したのが、ちょうど10年前の2005年4月だった。今号で詩齢98号をかぞえ、もうすぐ100号となる。最初からすべてわたしのパソコンで編集・制作してきたが、この10年間で何度かパソコンがクラッシュして、大部分のデータが消えてしまった。しかし印刷した紙媒体の版下と、印刷した冊子はすべて揃っているので、増刷りすることは可能である。修正箇所はパソコン上で訂正して新しい版下にすればいい(面倒な作業だが)。一部PDFファイルに転換してネット上に公開しているのも、救いである。こうして振り返ってみると、データの安全性は、なにかひとつの媒体(例えば、パソコンの中のファイル)に頼ってしまうと、いざという時に痛い目にあう。昔から言われているように紙媒体に印刷しておくのが安心材料のひとつであり、ネット上にアップロードできるファイル形式なら実行し、それもまた安心材料のひとつである。パソコンを決して信じてはいけない—これがこの10年間で得た教訓である。/1月の読書会は、詩人・評論家の京谷裕彰氏を招き語ってもらう。〈大橋記〉

新連載

富 哲 世

ひと言詩評

杉本真維子(すぎもとまこと)…詩集「裾花」(2014)。/何か幸福なものに守られている、という約束の甘さがない、ことばだけを武器にした、テキストの鏡像的厳しさが漂う詩集。「裾花」とはおそらく地名であろうが、前詩集「袖口の動物」の袖と言い、裾花の裾といいその周縁性が、波立つオブセッションのこちらで〈患う欠片〉をさぐり当て、〈墓を洗う、仕事〉のように言葉をこなす詩人の、暮らしのポジションを暗喩しているのかもしれない。

大崎清夏(おおさき・さやか)…詩集「地面」(2010)、詩集「指差すことができない」(2014)、詩集「私と遊んで」(2014)、マイナヒ現代詩歌セレクション。/ものがたり、おはなしがスライドしてつぎつぎと紡ぎだされていく、てらいのない発想の軽快さ。映画のストーリーを粗くなぞるような詩言語の風体の自由さであったり、内と外との温度差を引き受ける、寓話風な物語であったりする。それはシーニュとレファランの幸福な一致を示しているが、その自然体は、わたしたちの日常のスピードが当たり前のこととして見逃し、背後へと遣り過ごし取りこぼしつづけている世界への注視(愛)であり、それ故に日常の膠着性への抗議でもある。次々とよりあわされて繰り出されるフィジカルな経験世界像の移りゆきは、世界やにんげんのはかなさをも浮き彫りにしているようにみえる。わたしたちはワクワクしながら気の利いたリゴリズムの突飛さと、意外性を期待させる粗筋の、小気味よいアナキズムの展開を追う。抑圧的仮構性の希薄な、悪びれることのない受容の姿を見せる、希望へも絶望へも等距離を保つような、〈生死〉の繰り込まれた情報処理の覚めた自由さ—それが人並みであることの受容である—が、時代の顔を体現しているのだろう。生きる、というわたしたちのおそろしい闘いのなかで、詩はいまも、世界の翻訳でありうる。

高橋雅城

今は昔、大学時代のころのことである。私は、毎日鬱々として大学に出てこない先輩のところへ、一・五リットルのペットボトルのオレンジジュースを持って見舞いに行った。「やあ」とか「ああ」と会話はしたと思う。先輩は寢床から出ることなく私と話をした。私は、台所から二つコップを持ってくると、一杯ずつオレンジジュースを飲んだ。

一週間か十日しただろうか。また私は先輩の見舞いに行った。先輩の寢床のそばには、なにやらグレープフルーツ色の液体に褐色のクラゲ状ものが浮いたペットボトルが置かれている。「先輩、紅茶キノコ作ったんですか?」「いや、このまえ、高橋君が持ってきてくれたジュースだよ」。

今は昔。やはりその先輩の話。昼敷きの部屋なのに、ゴミやら雑誌や履き古したパンツやらなんやらで畳が見えないほど散らかっていた。しかし、その先輩も無事卒業することとなり、引越しの手伝いに行った。ゴミをどんどん捨ててゆき、部屋の隅のゴミをどけると、そこにはたんぽぽの花が咲いていた。

知らぬうち恋も芽生えて卒業生

今は昔。おなじみの先輩の話。先輩の下宿に遊びに行く、先輩はたまたまお茶を入れてくれた。急須というもの、大学生のことだから、瀬戸物の上等なものではない。へんなのアルミでできたものである。世間話をし、その日は先輩の下宿を後にした。

何週間か経っただろうか。ふたたび、先輩の下宿に遊びに行った。「おし、またお茶入れてやるよ」と先輩は言った。よく見るとそのアルミの急須の蓋が持ち上がっている。「なんだ?」先輩はアルミの急須の蓋をとると、そこにはキノコが生えていた。

今は昔。件の先輩の話。先輩は大学に入ったころ、授業にも出ず近くの川で釣りばかりして悶々としていた。ある時、大きな雷魚を釣ったのだそう。「これ、精力つくんだよね」と言って、実家が料理屋だという先輩はその雷魚を三枚におろし刺身にして食べた。

さて何週間か経ったろうか。先輩がある朝おきると、腕にみみず腫れができています。何かなと思つてつつくと、そのみみず腫れが「つ、つ、つ、つ、……」と動いたとのこと。

遠くには鳶蛭蚪の紐ゆらゆらと

◆ fromage

月村香

livre facile に疲れたあの娘は女中にフロマーージュをたくさん運んでこさせた
 チェック柄のロングスカートがちつとも似合わない詩ばかり書いては大声で
 それを読んでいる娘ははつきり言つて
 人生にあまりにも望んだものわずかに
 してそれで彼女にもいずれ最期の時
 が来るのであるが全くかまわないわ
 という顔をするのだ古いことばで言えば
 アンニュイだまだ恋はできる彼女は若
 いからしかし生き方がなつてないあた
 りまえだサボタージュしているのだから
 それでとうとうチーズをねずみにと
 られてしまったのだ

◆石の軌跡

大西久代

海はその一日を終えようとしていた。乾いた風。ジャカラランダの甘い香り。波音が暮れゆく時のたゆたいを知らせる。盲のまま老いたわたしが安息の今日を抱き。比類ない地上の黄昏にそつと触れる

その声は清らかな響きで耳に届いた

——我らみな滅びる一個の石である。見えざる石の孤独とすべてを見なければならぬ。苦しみもまた同じである。我らは宇宙より放たれた飛礫。置き去りにされ砕け散るが命運。村を訪れたあの人のゆるがぬ言葉。さまよう眼を一瞬明るませたなら恩寵。薄汚れ避けた着衣に染みたさげすみ

すべらかな感触が温めた。手の中に鳥ある。いは魚。鳥は生暖かく魚は冷たい体をぬめらせ撥ねた。鳥は果てない空へ。魚は波音が絶えたくらみに。彼方へ行こうとするもの。あの人が辿りゆく道。見えない世界に

置かれ躍動する生きもの。村に取り残され毒蛾となってゆくわたしにもたらされる一条のあかり

小高い丘に広がる墓地で小石を集めて歩く。背を屈め耳を傾ける。石のまるみが包みこむぬくもり。海から吹く風に体をあずける。争いの形に歪む意思。握りしめた過去からの声。がやがて指先からこぼれ落ち

石という磁力。古世紀から発せられた伝承を引き継ぎ。人と地上との境界線で果てのない時を探ってきた。霊媒といわれるなら刻まれた文字。占方といわれるならその形。生れ出た地平にころがりでると。血を滲ませた石は丘をころがり崖にぶつかり。やがて岸辺にたどり着く

特集／阪神・淡路大震災から20年

◆あのとき（エッセイ）

千田草介

私は徹夜していた。小説の書き方なんぞ誰からも教わったことがないのにある筋から頼まれて断れず通信講座を受け持っていたのだ。送られてきた受講生の作品を読んで添削をし寸評を書くのが仕事であるが、よほど締め切りに追われていたのだろう、睡眠不足には耐えられない体質なので完徹することはまずないのだが、その滅多にない例外的な朝が一月十七日、連休明けの平日のことだった。轟音とともに不意にワイプロがとびあがって画面が消え、部屋も真つ暗になった。顔がひきつるのが自分でもわかった。ジェットコースターが下降するとき感じるのに近い、気持ちの悪い落下感があったのだ。停電はすぐに回復した。枕の上にテレビがころがっていた。いつものように寝ていたら顔面ブラウン管を受けることになっていただろう。そのテレビを起こして電源を入れると、明石海峡に赤い印があつて震度6と表示されていた。写真展に出す予定のとおつておきの作品、チベットの虹が、落ちてきたカラーボックスで破碎されていた。明るくなつてから睡魔にさいなまれながら軒屋根にのぼり、ずり落ちた屋根瓦の応急処置をしていると余震がきて、本震のときにはあまりのことに出なかつた叫び声が、このときは思わず出た。神戸のようすがわかりはじめるまで、だいぶん時間がかかった。はつきりわかる被害の第一報は、神戸西市民病院の建物がへしやがっている映像だった。眠気はそのあたりで限界に達した。

◆二十年めの慚愧

飛鳥井れん

あの日、
いづれ流れる、雲の
どこへでも飛び去れる、島の
火の粉のかからない、報道ヘリコプターの
我が家のドアスコープにあてた、眼の

その刻はそんなことを
（浜松ではほんの一揺れ）

ブラウン管のむこう
灰色のけむりに太陽と月は奪われ
炎の舌だけがあかく
ふきあげる黒心に
航空写真は焦がされていた

その刻、
瓦礫に身動きできない親が子に
もういいから先に逃げろと手を振り
生き埋めの夫が妻の胸にいい人生やった
ありがとうと言葉で一生ぶんの糧をきざみ
恋人をさがす婚約者の
あきらめきれない叫びが熱風にちぎられ
かばった母親の冷たくなる胸のしたで
幼子がお母ちゃんと呼びつづけ
そんな刻のそんなことは
その刻に、どうして……

◆ろっけんみち

野口裕

アーケードの切れたあたりを左に曲がると
和菓子屋は赤飯を売り
散りばめられた小豆が暗号で
その頃なかつた地下鉄入口はタイムトンネル
階段を降りたらあの画廊のはずだ

月一通つたそこで語り合つたこまごましたこと
メジャーなんぞくそくらえとマイナーの意地を力説する男
平面の極めがたさを語る絵描き
火葬の途中にむくりと起き上がる印度の屍を語る紙芝居屋
次の仮面展に顔を貸してくれと起草する俺
憑かれたように語り合つては

また再会を約した

終わった 寒いね 解散! と
ボランティアはあつけなく終わった
おかげでタイムトンネルに潜り込む余裕もできたのだが

あれから今に至るまでに
何があつたのかぐらひは分かつている
何も残つていないのは分かつている
もう男たちが一堂に会することはない

だから黙祷までには戻つた
鎮魂のための雑踏が
多少祝祭に似ていたとしても

……
黙祷の雑踏に
元氣な子の泣き声が響いた
それはとても良いことだ

◆苦いジュース

黒田ナオ

天井裏に龍が住みついていて
僕が何度言つたところで
いつたい誰が信じてくれるというのだろう
龍はいつもたくさんのダイレクトメールと一緒に
白い大判の封筒につめ込まれて
玄関のポストに届けられた

封を開いたとたん
すると目の前で
天井裏へと忍び込み
鱗を光らせ
深い緑の目玉でじつと
こちらの様子をうかがっている
みんなはいつもと同じように
退屈な会話を続け

テーブルの上に置かれた

苦いジュースを
おいしいおいしいと飲み続けている

夜になると龍は

誰かの夢の中へと潜り込み
むしやりむしやりむしやりと
しつぽのようなものを食べている

僕のしつぽ
誰かのしつぽ
何か
その人そのもののようなものを
こっそり食べているのだ

気がつけば
しつぽを無くした僕たちは
カゲロウみたいにふわふわと軽くなつてしまひ

いつか
流れてくる風に吹き飛ばされ
新型ウイルスみたいに
世界中にばら撒かれてしまうのだろうか

◆行き方 知れずとも

上野都

二万人 五万人 十万人 十五万人：

どこですか

どこにいますか

赤に 青に 緑に 黄色に

これから誰が

どの手で あなたを探し

どの地図であなたを取り戻すのだろう

あなたの居るところから：

探しています

居てください

そこに

あなたが居たところに

知っていてください

私が忘れないところが

あなたに近いことを

あなたを見つけたのは

私には無理かもしれない

私がいなくなったあとも

それでも

「がれき」と呼ばれる六道の

記憶の山を越え

あなたのままに

どうぞ あなたが居たところへ

そこへ

そこへ

居てください。

二〇一二年八月十五日

◆海への道

福田知子

行き暮れ

塞がれ

打ち捨てられた

降る雨

灰

焼けた隘路に

天に

地に

海から迎えにきたはずのひと

罎の入った電灯に木霊する夜光虫の囁き

それらはすぐに歪み 沈みこんでしまう

ここ あそこらへんの何かが猫のすり抜けた光の道を

邪魔して行進するから

とびぬけた野鼠の逆襲がまた始まろうとしている

蘊蓄ばかり垂れる漁師はまた一人 沖へと吸い寄せら

れたまま帰らず

浜辺にはとうとう人っ子ひとりいなくなってしまった

海岸から続く海苔の草むらはファスナーを閉じるよう

に均され

曲がりくねった坂道はすでもう過去の時間に閉じられ
たままだ

振り向き振り向き猫と見たあの景色は三角の扉に閉じ
焦げたトライアングルから茫茫と青草がはみ出るばかり
朽ち木の囲い堀から漏れるやけに黄色いうすあかりにも
懐かしい家族の人影は映しだされなくなった

みゆうと哭く猫と一升瓶を抱いて星を仰いだ夜にもチェ
ルノブイリの灰はたしかに降っていた

だが二十年目のいま海続きの道にチェルノブイリよりも
つと高濃度の灰が降り続けていることをあのときだれ
が想像しえたか

夏に向けて殺菌された中学校のプールを熊内八幡さんに
向かう石段の上から俯瞰してみれば

そこには午後の美術室のビーナス それからアグリッパ
理科室のホルマリン漬けのラットのごとく日々は過ぎ
河原の中洲にチョウの標本さながら這いつくばる

《詩人通りより》18

1945年1月22日エルゼ忌に寄せて

岩脇リーベル豊美

詩人エルゼ・ラスカー＝シューラーがエルサレムで亡くなったのは、第二次世界大戦終戦を待たず1945年1月22日だった。今年の今日で70年になる。この日の前後のメディアには、文学史における「妖艶な」、「情熱的でエキゾチックな」、「モダンなアヴァンギャルド」といった形容詞がユダヤ系ドイツ詩人のために踊った。エルゼを紹介するときに必ず挿入される評が以下のものである、「この人が、ドイツにかつて存在したなかで最も偉大な女性詩人だった。〔…〕彼女の諸テーマはユダヤ的であり、彼女の想像力はオリエンタ的だったが、その言語はドイツ語だった。豊潤で華やかで、しかも繊細なドイツ語、どんな語句にあつても創造的なものから萌芽するような、成熟し甘美な言語だった。彼女は常に自分に確信をもち、自分自身と幻想的に共謀していたし、あらゆる飽満、確実、小綺麗なだけのものに対して敵対的であつた。彼

女は、この神秘からヴェールをはがさずに、しかも彼女の本質を覆い隠すこともなく、この言語で熱烈な感情を表現することを可能にしたのである。これは、数年にわたって恋愛関係をもつこととなる、17歳年下の医師であり詩人であつたゴットフリート・ベンが追想しているものである。(Benn, Gottfried: Rede auf Elise Lasker-Schüler. In: Gesammelte Werke in vier Bänden Herausgegeben von Dieter Wellershoff. Wiesbaden 1959, Bd. I, S. 538.) 数カ月前に拙文で触れた詩集『人類の薄明』に、表現主義詩人ベントともにエルゼは15編に及ぶ詩を寄せている。どの伝記にも、このふたりの詩人は1912年に邂逅したとあり、エルゼは短期間のうちに、ベンに捧げるべく数多くの恋愛詩を書いている。ベンはというと、1914年にはアメリカへの旅、医長としての昇格、結婚とつづき、上のようにエルゼを評価すると同時に、「不可解な眼差しの、大きな、鴉のように黒いよく動く眼をしていた。当時であれその後であれ、彼女と出歩けば必ず、あたりは静まり返り、皆が彼女の姿を眼で追うことを覚悟しなければならなかつた。彼女は奇抜な幅広いのスカートやズボンを履き眼を剥くような上着を着ていた。首や腕には、毒々しい偽物の装飾品、鎖、イヤリングがじゃらじゃら音をたてていた」とエルゼの変人振りを克明に描写しているのである。(S. 538) エルゼは自ら「バグダッドのテイロー」や「アラオの愛人」、また「アラビアの女性詩人」と名乗ることもあつたが、75歳の生涯を終えるまで「テーベンの王子ユスフ」に落ち着いていたようだ。そしてベンをして、彼女はすべてのすべてだつたと言わせるのである。

エルゼ・シューラーは1869年2月11日ヴッパータール＝エルバーフェルトの裕福なユダヤ人銀行家の家庭に生まれたが、19世紀終りの離婚後も、両親がなくなつたあとも、自分の収入はなく、主に画家詩人仲間を支えられて、一番の支援者はウィーンの作家カール・クラウスだつたが、その時期、ゲオルク・グロース、オスカー・ココシユカ、フランツ・マルクやゲオルク・トラークルといった錚々たる当時の芸術家と交友関係を築き、詩集

日、詩工房で追悼の意をこめて読んだ『私の奇蹟』より拙訳。

「そつと言う」

エルゼ・ラスカー＝シューラー

あなたはすべての星を取りあげた
わたしの心を経て

わたしの思いが縮むから
踊らなければ

あなたはいつも見上げさせるばかりで
わたしの命を疲れさせる

わたしにはもうこの宵を
垣根越しに運び出せない

小川の鏡にもう
わたしを見つけれない

あなたは天使から
浮遊する瞳を盗んだ

でもわたしはかれらの泥流から
摘み食いをする

わたしの心はゆつくりと没落するが
何処へかは知らない

わたしの組織のあちこちに襲来する
おそらくあなたの手のうちに

出版・朗読するのみならず、戯曲を書き、自ら演出したり、画家として展覧会を開いたりしている。そしてその画像を見てみると、詩人自身の写真にしろ、彼女の描いた王子の絵にしろ、ベンの語つた風貌のエルゼ像が浮かび上がってくるようである。

余談になるが、そういつたことをフェイスブックにあげたところ、ウィーンに住む宗教哲学者のともだちが、ヴィットゲンシュタインが雑誌『ブレナナー』編者のルドヴィヒ・フォン・フィッシャーに、遺産相続のうちの（まだ無名のヴィットゲンシュタインが父の遺産を芸術家達に寄贈したことは既知であつたが）、十萬クローネから二万クローネをリルケとトラークルに、ユスフ王子であるエルゼとココシユカに好きなように分けるようにと、フィッシャーに渡したということが書かれていない、というコメントをもらつた。その事実は知らなかつたが、とにかく壮絶で、芸術のための素晴らしい土壌でもあり、時代でもあつたことは確かだ、とそのコメントにもヴィットゲンシュタインにも感謝したのであつた。

エルゼは1914年に『テーベの王子』を出版しているが、登場人物に、ユスフ王子はエルゼ自身で、蛮人ギーゼルヘアはベン、黄金騎士はトラークル、地頭はフィッシャー、フランツ・マルクは青騎士で、ヴィットゲンシュタインは地主だそうである。ちなみに、青騎士フランツ・マルクとテーベンのユスフ王子との間には、まったく私的で自筆の詩的画家的カードや書簡のやり取りがなされ、エルゼからは66通、マルクからは28通が送られている。その書簡が何年か前にカタログになつたので、どうしても欲しくて購入した。

1927年にはエルゼは、息子パウルの死に打ちひしがれ、33年にヒトラーが帝国宰相になると、彼女を取り巻く環境は一変し、1939年、仲介者も同伴者もなくパレスティナへと逃亡。それでも、1943年にはエルゼの最も美しいと言われる詩集『私の青いピアノ』をエルサルムで、もちろんドイツ語で出版する。ヘブライ文字の碑文のある墓標はオリヴ山に建てられている。前

◆この場所で

中堂けいこ

なにも書かなくともすでに書かれた文字を
キーボードで押さえ
すぐちかくの坂のしたからパワーショベルの
それらしい響きは土の層をあつめたりひろげたりするが
つきつぎに更地から
なにも身に付けない人がやってきて
かれらは足音をたてず宙をうくように折りたたまれ
しだいに曠野がそのまま湖になるその光景を
もう知っているのではないか
指先から洩れ出るわずかな水滴は光のなかで
うつすらとうきあがり
ゆきさきの無い場所をゆらす

◆待っているもの

大橋愛由等

もうひとつ角を曲がる。冬の風が立つて待
っていた。この時期だけ十四番地を迷う犬
がいる。ユキという名である。あらゆる音
が消えたことのある街だから、静寂が薄笑
いをしている。「ぼくのあなたのぼくのあ
なたのぼく……」——人称がこわれてしま
ったらしい。いやそれはノウゼンカズラの
枯葉のこすれ合う声だろう。こんなにこの
街に彷徨^{さまよ}い人が多ければ名札をつければ
良いと言う人がいる。ひとびとをどのよう
に区別して名付けするのか誰も分らない
。「黙っていたけど」とかたりだす者はい
ないだろうか。きつとそれは流浪してしま
った家蝙蝠たちに違いないのだが。昨日切
断された切り株がわたしを呼んでいる。
「どうだ数えてみる」と見入ったのは年輪
だった。「あと少しで二〇だった」。かなし
い響き、泣けばいいのだろうか。

◆悼む

有時秀記

小雨がひとしきり降りつづいたのち、深夜の空に月明りがもどつてくる。門前のすすきにはあまたの露が垂れさがり月の光に照らされて眠っている。

月光は、しかし露の中に射し込み、眠る人の夢を覗きみるように、露の滴に入りこむ。永遠の眠りに射し込む光は、あたかも露の中の眠りを揺さぶるかのようだ。

月光を浴びて垂れさがる夜露は、夢の繭である。悼みが夢の繭を取り巻いて湧き出すと、かつて見たサファイアの輝きのような蒼空を悼みの狭間に垣間見る。

亡き人の魂が、類まれな花を咲かせるのは、深夜にオーロラを幻想する時か。ひとりのヒジリが闇に浮かび、露ともおぼしい鏡の球体を撫でさする。青い瞳に優しい眼差しを湛えながら、ヒジリは露のような球体を愛で、月の光が至上の愛を開き示すのを待ち望む。瞬きが永遠である狂気の時間を顕現するために。

亡き骸が、魂を失った時、失われたものは鏡像に映じ、あるべき場所に心像を取り結ぶ。あるべき場所、鏡に隠された場所。走馬灯を回転させたのちにヒジリが顕現させる反射光。悪態と悪場所につながるものが滅ぶ狭間の世界。悼むことが顕現の証であると、ヒジリが孔雀に乗って語るのは、鏡の中で、月光が太陽光と交わる瞬間のことだ。かくあれ。

貞久秀紀『雲の行方』をよむ
中堂けいこ

けつして難しい本ではないのに読み手に困難を強いてくる、そう感じるのには私だけだろうか。作者は命題(設問)をたて自在に考えを展開していく。同意できるときもあるが、命題それじたいが困難なこともある。一から三九〇まで短い章が続いてたがいに枝葉に分かれながら作者の叙述に呼応している。

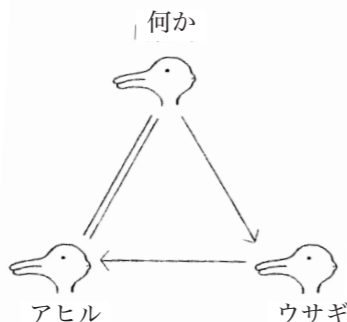
ふつうの感覚しかもたない私が解釈するたいへん平明な空論になりそうでこまるが、読みすすむうちにふつうとはなにか、なにを基準にしてふつうのスタンダードがなりたつのか、という貞久氏の声がかきこえてきそうだ。

“(一) ある文によつて暗示されることとががらすでにその文に明示されている—そのような文があるだろうか。ゆれている枝によつてよびおこされるものが、ほかでもないそのゆれている枝であるように。”

ここでつまずいてしまうと先にすすめない。こんなこともあるかもしれないととりあえずはつきしたがう。詩人がかかえている、知覚感覚の

過敏性とこだわりが露出し、考える過程を写生的に表現しようとしている。つまり作者は独自の言語感覚をうちたてようとしているのかもしれない。私にはよくわからない。うのみにしてさきにすすむ。すすむうち門がひらけ、なぞかけ、Aがあらわれ、椅子の足が何本かわからない人があらわれ、帽子屋の品があらわれ、XII3があらわれ、うさぎとあひるに見えるジャストローの錯視図がしめされ、走るように歩く人もいる。おもしろい。

(二四一) 正岡子規の(道ばたに只一本の茂り哉)この句



を読み思い浮かんでくる光景があるが、思い浮かぶ以前のわたしには何が通じてきてわかれていたのだろうか。その「何か」こそがこの句によつて明示されていることとしたら……この設問はむづかしい。心理のすきをついていようでもある。認識のずれが自覚されているのだろうか。貞久氏はこの何かが気になつてしかたがないらしい。それは写生の根幹にかかわる何かであり、ことばに記述するときのすでに記述されてしまつておられるとおもわれるときの何かなのだ。詩はそのようにして書かれた何かをふたたび書くという行為なのだろう。記憶のゆりもどしではない。書きながらすでに私自身は向こうがわ(時間的な未来)から何かを再認している、のではないか。これなら私もわかる。やつと腑におちた。

明示と暗示は反対語ではない。文法上は対義語である。だが心理的には補充関係にあり地つづきであるかもしれない。

したがって、鉛筆で紙上計算するとき、わたしは指でなぞりながら計算するときと同じに当のその紙上計算しているとも、暗算しているとも感じられる(二八九)この二つの感じのすきまに「何か」が明示されているのだろう。このふたつは並列ではない。

門がひらけた先は平原がひろがっている。雲がわき立ちひとつとして同じ光景がないのいつかの雲の光景がそこにあり無色のことは無性のことばと向き合おうとする詩人がいる。平原のさきになにかあるか。もつとさきを知りたいとおもう。私は誤読を楽しんでいる。

二〇一四年 思潮社刊

◆光あれ

岩脇リーベル豊美

光あれと地が揺れると
低空の雲の名が稲穂や肋骨へと変わる
電磁場の波間に
幻怪な客船が錨を投げる
獣たちは怯え
鼠はわけもなく踊りだす
近海魚も住処から脱出しようとする
鷗は水際に整列したまま
同じ方向を凝視している
細い島の真上でバランスをとると

内的熱量を吐露するフェノメノン

むかし住んでいた世界と同種の生物に
港湾でも街角でも遭遇する
わたしはもういいからと
冷たい親の腕のなかで
子の遺体は綺麗な顔で眠っている
廃屋の前で
白い毛布に身を包み父を呼ぶ少女に
いまなお喪主として目礼をもらい
瓦礫のなかから言葉を生んだ
美しい都市は
光あれと潮汐とともに再生した
誰かが祈った証しの包みが届く

◆アナ、タ

大西隆志

見えない穴に気を取られていると
地下通路の手抜き穴に足をとられていたりする
沈んでしまうことはないが
気分は枯れた花を手にして笑っているようでもあり
もみくちゃの紙を
一瞬でも花と思えたのか
亀之助さんはアスファルト路上が黄色に染まることもない
と、書いたが本当は銀杏の枯葉が一面にやってきたのだ
穴はあちらにもこちらにもあり
深呼吸のたびに
一瞬の景色を呼び込んでくる
ジタバタするに相應しい日々なのかもしれない
タイロタツ、晩秋ノ雨、ナゲダサズ、下手な句をメモリ

自分自身のマノメケタ、身を気にしている

無視されても語ってほしい
メモを取りながら、忘却されていく地点に誰も立とうとはしない
やっかいなのだ、穴を覗くことは
制服好きのヒトは愛想を振りまいて
別の穴を呼び寄せている
線引きの敵は穴を穿ちなが
疑似餌のようなコトバを差し出してくる
穴は、見えない穴に
ありのままの夢を詰め込んではいるが
黙り込んでいくコトバに
反転反撃されつつあるのかもしれない
穴は、あなたでもあり
折り返し点を過ぎた
レキシでもある
地面に国家論が
穴に沈む
野はぼつりぼつりと浮かび上がり
アナ、タ
やっとならにたどりついたよ

さくつき

高谷和幸

壱 さくつき（主語を失くす試み）

宙吊りにされた白いキツネ——の目。
うたうたと草の波動を——（ヤブ椿）。
目に見入られたわたしの目をおたべ。
あかいはなびらをしきつめておいた
——「ほら、あれが遠近法だよ」——
——ひとつはひとつを記憶したものをして
れとして排除するものではない。

励起する腐肉
緑色のトンネル、食べられない、つながっ
て——見えるぼく。

——ちがう——ものによる

——放電の——（わたくしの気配）。

アイオーンは桎梏の素数

隣同士の——メタボリズムな記号がおちて
くる

——まだ待つ気だね——

男の古い名

舞台中央のこんがりとした時代

白い霊体の

宙にぶらさがった——（さくつきの）

大地に残された目

ひととひだの——ヤブ椿に。

舟の底にたまった水。

弐 えんぺい（大地で蔽われた身体）

陽気に火星へ行こう。さくつきと（さく
を）一本の身体を細かく切りそろえ、はじ
まりとおしまいを闇に放り込んだ鍋（大き
な壺かもしれず）のうまい季節になったか
ら、ほら病気は気からって言うし、ほっこ
りした火星を楽しもうかと言うものさ。劫
波に沈没よ。時代よ、どう見たってわたし
は舟って身分ではありません。わたくしの気
配の分子のつらなりでありまして、大地の
底の方からの灼熱にこのように震えて、目
を患っておりませう。

参 つうか（イメージと記憶のあいだを）

二〇年を

アイオーンの心覚えのため

盲者に二つの名を与えてほしい

白いキツネの燃える目を

手に受け——（シテの手の上に乗って）

暗くなる——膝をおった（それを、それと

言う）

——ごろごろと

隻眼の

弦（イメージ）。運び役はもはや見えす

僻眼の

弓（記憶）。自分語りは（いまだに、そ
れと言う）

杖をつき

——わたしたちは、

一列に従いながら

（盲目の師を殺すために）

すれちがう。

肆 しょく（奇跡は目に見えない）

雨水の水滴と混ざり合う糞尿の負債につい
て木材の水分でやわらかく蓋をしたらうえに起
こったこれは奇跡だろういわゆる水棲動物
のエビを死んだエビとしか世界名辞として
使わなかった天ぷらを口の奥に無理やり
押し込もうとしている彼についてぼくは其
の舌状のトマソン寝台のそばに立っていた
彼女がぼくに気が付いたように水滴で濡れ
た髪を拭き取りつつ振り返ったのでその時
の彼は彼で久しぶりに快便をした気持ちに
なったエビだ水中のエビをそうぼくたちは
わたしたちの中に出したのだ。

◆震後詩のために

（ふたつの詩と、ふたつの註）

富 哲世

1 新年

Dayサービスセンターの看板の見える

ひとりごと駅で

正月はやつぱり

正月なんだなあとと思う

同じ道をたどり

同じ地名をゆく

晴れた丘の姿と

谷間の町の見える側の

ひとのまばらな席に座り

山の電車はやつぱり寒い

だれもぼうしと

手袋とマフラーをぬげやしない

ぼんやりと奥のほうをじかんが生きている

つと立ち上がって

ドアの窓辺に寄り

射し込む朝日にむかってひとがスマホを向けた

うつ向いてそれから

アケオメ

なんて写メを送っているんだらう

食欲とはいやしいものだ

線路ぎわの傾斜にやさしそうに

長い葉を舌のように晒した植物が並んで
女の子たちのあざやかな悲鳴がする

きやあきやあきやあ

あははははは

（顔のないスパーマン）

泣きたいことが洗われている

明けましておめでと

さみしさに癒されて

乗り換え駅の終着に着いて

ひとがいなくなつて

だから最後に言う

※「阪神・淡路大震災20年」というテーマが

今回編集人から提案された。こういう設定の

され方は、あまり好きではない。詩はもつと欲

望に忠実に、自由であるべきだと思ふし、出来

事を体験した者にとって「今」を書くというこ

とは、すべからず「震後詩」を書いてること

に他ならないからだ。けれど20年と言われて

改めて感慨もあるし、焼きついていっている風景や

振る舞いの数々の記憶もある。編者はその

「今・震後詩」の他ならなさを再認識させ、時

が来た！ 忘れるな！ と書く「今」を再喚起さ

せようとしているのだ。そこでかつてと同じ

朝同じ場所を移動している今現在を意識しな

がら、新年の詩を書いた。もう会えないんだな

あ、とひと恋しい気持ちも生まれていた、生者

の側から書いてみました。

2 ぼくらは見た、

ぼくらは見た、まだ生きている

奴らの何人かを

故郷へ帰る

鳥刺しのシャンソンの

幕間狂言の歌を

突然ざわめきが

苦悩のざわめきが落ちる

雨が降る

犬たちの空色のテキスト

凍てついた翼

食べてはいけない

招いてください

わたしはケイタイの喋るとても

短い孤独の

ひまわりを幽霊船のような姿勢で窓辺に植え

最少の代価を払ってしらんぷりをしながら

だまつて貝殻を聴く

血の薄のろなめぐりのなかで

もしも何度も繰り返して

見えない桜桃と一羽の冠鷲が太陽のベルを鳴らして

蛇の曙のための詩篇を

破滅の瞬間高らかに朗唱しながら無題の謬を耳に

従え

頂上と重力を和合させるとすれば

愛の祈りのそばでみじめさを無意味にかき立てる

川岸の空き地に浮かぶ泣く月と嘘つきで大きな影に

イブ・タンギーの増殖する

反抗の道筋を示す

15年1月17日

白い花瓶のなかで

「ぼくの部屋は鳥々の思い出でいっぱいだ」

※死者の側から往還しながら、書いていたの
かもしれせん。

◆ 哭晁卿衡

李白（紹介者・有時秀記）

日本晁卿辭帝都
征帆一片遶蓬壺
明月不歸沈碧海
白雲愁色滿蒼梧

晁卿衡を哭す

日本の晁卿 帝都を辞し
征帆 一片 蓬壺を遶る
明月は帰らず 碧海に沈み
白雲 愁色 蒼梧に満つ

病室の様子がいつもと違っていた。午前一時を過ぎてい
るのに、カーテンで仕切られた入院患者用の区画にテレビ
が点つたままなのだ。病院の規則では十時の消灯以降、テレ
ビも携帯電話も控えなければならぬ。巡回の看護師さん
が来たがそれを咎めない。

この夏私は腸閉塞に二度見舞われ、七月に続いて八月も
入院を余儀なくされた。月がかわり、もう九月に入ってい
る。日ごと落日が病棟の窓を鮮やかに染め、中庭の植え込み
では、もうすぐ虫が鳴き出すだろう。

腸閉塞は屈辱的な病である。鼻から小腸までチューブを
通して、汚らしく滞留しているものを抜き取らなければな
らない。食事は摂れないから、胸の静脈に針を刺して点滴の
袋をぶらさげる。ひっきりなしに這いのぼつてくる尿意に
眠りは寸断され、疲労が蓄積する夜明けまで空しく刻を数
えるしかないのだ。

トイレに立つ。いくつか病室の前を通る。やはり今夜は変
だ。どの部屋もテレビを点けている。何か大きな災害でも起
きたのだろうか。部屋に引き返し、携帯電話を持ってトイレ
に入った。そのとき病室の方から、どよめきのような声があ
がった。便器に坐って、あわててニュースを見る。

ああ、これだったのか。携帯電話の小さな画面には、緊急
ニュースとして、七年後のオリンピック開催地がたつた今
東京に決まったことが記されていた。歩く力が戻らない。な
ぜか部屋に帰りたくなかった。

その夜はまんじりともできなかった。六時になれば談話
室が使える。大型テレビが浮薄なお祭り騒ぎを流している
かと思うと気分が塞ぐが、「美しい」この国の民度とわがま
つりごとの品位を確かめておくのも必要かと考え直し、秋
冷の気配漂う中庭に突き出したその部屋に出かける。

深夜の病室で 寺岡良信

【註】死者を大声で哭いて痛む行為だが、一種の儀礼としての意味をもつ。

【晁卿衡】日本の留学生、阿倍仲麻呂の中国名。〈朝衡〉とも書く。〈卿〉は、仲麻呂が、天宝十二載（七五三年）に中国から帰国する際、秘書監兼衛尉卿であったことから、こう呼んだ（衛尉卿は軍器、儀仗等を掌る〈衛尉寺〉の長官）。また、友人に対する親愛の呼称として〈晁卿〉と呼んだとも考えられる。

仲麻呂は、同年の冬、遣唐使藤原清河らと同船して帰国したが、琉球で台風に遭って安南の驩州に漂着した。しかし、再び長安にもどつて唐朝に仕え、鎮南都護などの要職を経て、大暦五年（七七〇）正月に長安で没した。七十三歳。李白のこの詩は、仲麻呂遭難の翌年（七五四）、広陵（揚州）で友人の魏顥から遭難の知らせを聞き、生還を知らないまま、その死を哭したものだ。

【征帆】 旅行く船

【蓬壺】 東海中に在ると伝えられた仙山。蓬萊山をさす。

【蒼梧】 舜帝が巡幸して没したとされる湖南の九疑山。ここでは、それが飛来したという伝説のある東海の仙山（郁州山）をイメージしているであろう。

韻字「都、壺、梧」七言絶句

（岩波文庫『李白詩選』松浦友久編訳より）

ビールかけこそなかったものの、職業野球の祝勝会さながらのはしゃぎよう、フランス人形に振袖を着せたような女性がプレゼンテーションとやらにしゃしゃり出て、「オモテナシ」を連発する光景はまあいい。それらを難するほど私は狭量でも狷介でもない。だが日本国内閣総理大臣アベ某が自信たつぷりにぶちあげた演説はどうだろう。

アンダーコントロールという英語が耳につく。アベ某は国際オリンピック委員会の面々を前にぬけぬけと言いつつた。放射線汚染物質は福島湾内一キロに閉じ込めています―商品の誇大広告や偽装表示が問題となる昨今だが、これほど破廉恥な大嘘を堂々と世界に発信できる政治家も稀だと言わざるをえない。その膽力に私は鼻白む思いである。入院暮らしの身にとつて、時間は憂鬱なほど長い。閉塞を起している腸にさらに不快な異物が沈澱する感覚を、私はこの日一日馭しかねた。

（付記）その後、地震予知を担当する各種の機関や研究所の委員から、日本列島が火山や活断層の活動期に入ったとの調査結果が報告された。また自治体が作成するハザードマップも、被害の予想を上方に修正した。さらに福島第一原発からは、汚染水漏れの報告が繰り返され、東北三県では依然避難生活が続いている。オリンピック関連の「特需」による建築資材や労賃の高騰は、復興そのものを妨げるだろう。しかし東京五輪は粛々と進行し、安倍首相がプレゼンテーションにおける自らの発言を撤回する素振りなど、毛ほども見えない。

うた 神戸詞あしび

87-2015.01.25 大橋愛由等



震災直後の様子(撮影・たかとう匡子)

20回目をむかえた 震災一・一七の日

汁が振るまわれる。最近白米も炊いてくれているので、ちよつとした朝ごはんとなり重宝である。そこでは教会や、FMわいわい関係者の同窓会のような華やいだ雰囲気となる。私は、「1・17」と刻まれたキャンディーを知人や友人たちに配る。

▼am05:30／早朝は電車の便が悪く、震災が発生した時間に長田までたどりつけないために、タクシーを使って「たかとりカトリック教会」に赴く。すでに多くの人が集まっている。屋内の教会礼拝所「教会堂」が追悼会・法要の会場となっているので、寒さをしのげるので助かる。

▼am05:46／修験道の法螺貝が鳴るなかで、キリスト教カトリックと仏教（仏教青年会）の合同による一・一七追悼会・法要が始まる。司会は神田裕神父。最初はカトリックのミサ形式が進められる。賛美歌が歌われ、聖書の一節が朗唱される。私の隣人は賛美歌の歌い方が堂に入っている。今年震災からちょうど20周年ということもあり多くのマスメディアが押し寄せている。この数年の震災が起きた時間は鷹取の追悼会場で迎えることにしている。

▼am06:30／追悼会が終わると、教会堂の横にある食堂で豚

▼am08:30／新長田の喫茶店でモーニングを食べたあと、電車に乗っていちど自宅に戻る。今日は午後二時から、兵庫県現代詩協会主催の「震災を語る会」が催され、私が司会進行役を務める。会場参加者に配布する資料を作成して、会場の神戸文学館神戸市灘区に向かう。

▼pm14:00／震災語りが始まる。主な語り手は、同協会会長のたかとう匡子さん。私は司会をするかたわら、いくつかの発言をする。その一つは、すでに20年の年月の経過していることは、「わたしの現在」と同格となった「わたしの記憶」とむきあうことになる、ということ。

二つ目は、1月17日という日は、震災体験者、同関係者にとつて、「絶対日」であり、同時に、絶対時間＝絶対空間ではないかということ。広島は8・6、長崎が8・9、東北が3・11であるのと同様に、その都市や地域に現在いる人たちにとつて忘れたくとも忘れられない、避けたくとも避けられない強烈なインパクトを持つ日があり、それを「絶対日」と呼んでいいのではないかと思っている。

この語りの会後半は、去年末に協会が発行した会報特別号「震災から20年を想うアンソロジー」の作品をもとに語り合うというものだった。執筆したのは、会員全体の四分の一。この数字で見えてくるのは、震災の被災の度合い（人・モノ・地域・環境といった被災の深度）によって、表現のありようが異なる、ということである。作品を書かなかつた四分の三の「沈黙」をもまざしを向けてゆきたいのである。

▼pm08:00／神戸市三宮のスペイン料理カルメンでは、一・一七追悼フラメンコが開催される。出演は、〈グループ・キホーテ〉。カンテの鳥居貴子さんが中心となつて結成しているグループで、カルメンには初出場である。ギターリストには、ベテランの住田政男さんに加えて、川本一祐さんの二丁。バイレは初出場であるが日頃の練習の成果がよく出ていた。フラメンコはもと悲しみを表現する芸能。魂鎮めの意味もこめて、濃厚なライブが一時間つづいたのである。

詩と評論
月刊「Mélange」Vol.98
神戸

2015年01月25日 通巻98号
発行所／月刊「Mélange」編集部
〒650-0012 神戸市中央区北長狭通1-7-1 2F
編集・発行人／大橋愛由等（「Mélange」同人）
maroad66454@gmail.com
定価500円(税込)